



A TREASURY OF WORLD LITERATURE

# 世界の文学

49

サルトル

嘔吐 白井浩司訳

ビュトール

時間割 清水徹訳

中央公論社

サルトル  
ビュトール

訳者 白井浩司  
清水 徹

LA NAUSÉE by Jean-Paul Sartre  
Originally Copyrighted by Librairie  
Gallimard, Paris.

Illustrations : Copyrighted by S. P. A.  
D. E. M., Paris.

L'EMPLOI DU TEMPS by Michel Butor  
Originally Copyrighted by Editions de  
Minuit, Paris.

This books is published in Japan by  
arrangements with Librairie Gallimard,  
Editions de Minuit through the Bureau des  
Copyrights Français.

『嘔吐』は日本版權所有者たる「人文書院」  
の許可によって刊行されるものである

昭和39年1月12日初版発行

昭和42年12月1日18版発行

価 430 円

発行者 山越 豊

本文整版印刷 三晃印刷株式会社  
扉・函貼印刷 求竜堂印刷株式会社  
口絵印刷 東京プロセス株式会社  
本文用紙 三菱製紙株式会社  
クロス 日本クロス工業株式会社  
製函 加藤製函印刷株式会社  
製本 小泉製本株式会社

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋2丁目1番地  
電話(561)5921(代)振替東京34

目次

サルトル

嘔吐

ビュートル

時間割

解説

年譜

3

219

522

550



嘔  
吐

彼は社会的に重要な人間ではない。正真正銘の一個人である。

ルイ・フェルディナン・セリヌ 『教会』

カストールに捧ぐ

## 刊行者の緒言

このノートはアントワーン・ロカンタンの書類の中から発見されたものである。われわれはいっさい手を加えずに原文のまま発表する。

最初のページには日づけがなかったが、それがいわゆる日記の書出しより数週間前のものであると推定できる確実な根拠がある。だからそれは、遅くとも一九三二年一月の初旬に書かれたであろう。

当時、アントワーン・ロカンタンは、中部ヨーロッパ、北アフリカ、極東方面を旅行したのち、ド・ロルボン侯爵に関する歴史的研究を完成するため、ブーヴィルに三年前から滞在していた。



## 日づけのない紙片

いちばんよいことは、その日その日の出来事を書き止めておくことだろう。はつきり理解するために日記をつけること。取るに足りぬことのようにも、色合いを、小さな事実を、見のがさないこと。そして特に分類してみること。どういふふうに私が、このテーブルを、通りを、人びとを、刻みたばこ入れを見ているかを記すべきだ。なぜなら、変わったのは「へそっち」だからである。この変化の範囲と性質を、明確に決定しなければならぬ。たとえばここに、インク壺（インク壺）のはいったボール紙の容器がある。それを「以前に」はどう見ていたかを言う必要がある。そしていまではそれをどんなぐあいに……とところで、それは直角平行六面体であつて、ちゃんとテーブルの上——こんなふうにするのはばかげている。それについてなにも言うことはない。それこそ避けねばならないことだ。なんでもないので、奇を衒つてはいけない。日記をつけるときは、つぎのことが危険だと思ふ。すなわち万事誇張して考えること、待ち伏せをする気持

でいること、たえず眞実をでっちあげることである。ところで、私がいますぐにでも——まさにこのインク壺の容器とか、あるいはほかのどんな物体をながめても——一昨日のあの印象を思い出せることはたしかだ。私はいつも待ちかまえているべきだ。さもないとあの日の印象は、指のあいだからこぼれ落ちてしまふだろう。なにことも……してはならない。だが起こることのすべてを、念入りに、きわめて詳細に記すべきだ。

もちろん、土曜日と一昨日のあの出来事に関しては、もうなにも明瞭に書くことはできない。すでにあれは遠くなりすぎた。単に言えることは、いずれの場合でも、ふつうに事件と呼ばれるものが、まったく存在しなかつたということである。土曜日、子どもたちが水切りをして遊んでいた。私も彼らのまねをして、海へ小石を投げようと思つた。その瞬間に私は思い止まつて、石を手から落として立ち去つた。後ろで子どもたちが笑つていたから、おそらく私は気でも狂つたような様子をしていたにちがいない。

外部的にはそれだけだつた。私の内部に起こつたものは、あきらかな痕跡を残さなかつた。私はなにかをながめ、そしてそれが私をいやな気持ちにさせたのだ。しかしそのとき自分がながめていたのは海であつたか、海岸で拾つた小石であつたか、もう覚えていない。小石は平べ



ったかった。一方の面は全部乾いていたが、他の面は湿って泥がついていた。私は指の汚れないように、指を大きくあけて小石の両端を持っていた。

一昨日のことは、もつとずつと複雑であった。いまもうまく説明ができないが、そのときも、土曜日のように同時に二つのことが起き、それを取り違えてしまったのだ。しかし、そういうことをすべて紙に書いて楽しむのはよそう。つまるところ、明らかに私は恐怖に襲われたのだ。もしくはそのような種類の感情を抱いたのである。私になにを恐れたのか、それだけでもわかったならば、すでに大きく一步を踏みだしたことになるだろう。

奇妙なことに、自分が狂人であると考える気には、まだ一度もならない。けつしてそうではないとはつきり思つてさえている。すべてこれらの変化は、事物の変化だと思ふ。少なくともそういう確信を持ちたいのだ。

十時半

結局あれは、精神錯乱の軽い発作だったのだらう。もはやその痕跡もない。先週のへんてこな気持は、いまだはたいへん滑稽なことに思われる。もう二度とあんなことにはなるまい。今晚は、ひどくつろいだ、まったく市民的な気分での世に生きている。この部屋は北東に向いている。下は廃兵街と新しい駅の工事場である。ヴ

イクトールノワール大通りの一角の「駅員さんたちの店」の赤と白の灯火が窓越しに見える。パリ発の列車が着いたばかりだ。人びとは旧駅から出て、街へ散つて行く。足音と話し声が聞こえる。大勢の人が終電車を待っている。彼らは私の窓のちやうど真下のガス灯の周囲に、小さな、寂しげな塊りを作っているはずだ。ところで、まだ数分待たねばならない。電車は十時四十五分までは通らないだらう。今夜はセールスマンたちが来ませんように。それほど、私は眠りたい。それほど、遅くなつて訪れる眠りを求めている。一晩だけでもぐつすり眠れたら、あのような話なんか跡形もなくなっているだろう。

十一時十五分前。もうなにも心配することはない。すでに彼らは着いているだらう。せめてルーアンから来る男の目でなかつたらいいのだが。あの男は毎週やつて来る。二階の洗浄器つき二号室が彼のためにとつてある。まだ来るかも知れない。彼は寝る前によく「駅員さんたちの店」へ行つて、ビールを一杯飲む。それに、あまりうるさくはない。非常に背が低く、たいそう身ぎれいで、黒く光らせた口ひげを生やし、鬘をかぶっている。ほら、やつて来た。

彼が階段を上つてくるのを耳にしたとき、胸がちよつとどきどきした。それほど、それは私を安心させるものだった。こんな規則正しい世の中に、なにをこわがるこ

とがあるうか。私はもう自分が癒ったものと思う。

今度は「屠殺場発、溜池行」一七号電車だ。古鉄のやかましいひびきをたてて着き、そして出発する。いまそれは旅行靴と、眠っている子どもたちをぎっしり乗せて、溜池方面へ、工場街の方面へ、暗い東部に向かつて突進している。これは最終より一つ前の電車である。終電車は一時間後に、ここを通るだろう。

私は寝ようと思う。私は癒った。自分の気持を毎日、少女のように、新しい立派なノートに書くことはよそう。ただある場合に日記をつけることは、有益なことだろう。それは非常に……。

## 原注

- (1) 一語が欠けていた。
- (2) 一語(多分、でっちあげる、または捏造する、のいずれかだろう)が消されていた。別の言葉が消された上に書き加えられてあったが判読できない。
- (3) 明らかに夜の十時半である。以下につづく一節は、前節よりもずっとあとに書かれたものである。早くてその翌日だと考えたい。
- (4) 日づけのない紙片の文章はここで終わっている。

## 日記

一九三二年一月二十九日 月曜日

なにかが私の裡に起こった。もう疑う余地がない。それはありきたりの確信とか明白な証拠とかいったもののようにではなく、病気みたいにやってきたのである。それは少しずつ、陰険に私の裡に根を降ろした。私は自分がちよつと変で、なんだか居心地が悪いのを感じた。ただそれだけのことである。そいつは私の心の中にはいりこむと、静かにしていて、もう動こうともしなかった。そこで私は自分に言いきかせることができた。自分はどうもしていない、つまらぬ思い過ぎだ、と。しかしいまそれが明確な姿を現わした。

私は歴史家の任務が心理分析にあるとは思わない。歴史家は《野心》とか《利害関係》とかいうような総括的な名前と呼ばれる全体的な感情のみを仕事の対象とする。しかしながら、もし私が少しでも自分のことを知っているとしたら、いまこそそれを役立たすべきだろう。

たとえば、私の手になにかふだんと違ったあるもの、

すなわちパイプをつかむとか、フォークを握るとかの一種の方法がある。それとも、いまフォークがある種の握らせ方をすると言うべきかもしれない。さきほど自分の部屋にはいろいろとしたとき、私は急に立ち止まった。それはつめたい物が手の中にあつて、個性的なものによつて私の注意をうながしたのを、感じたからだつた。私は手を開いてながめた。私はただ単にノブを握つていたにすぎない。

今朝、図書館で独学者\*が、私に朝の挨拶をしに來たとき、彼がだれであるかを思い出すまでに、十秒ほどかかつた。私は見覚えのない顔を、顔と言えないようなものを、ながめていたのだ。それから、太くて白い蛆のような彼の手が私の手の中にあつた。私はすぐにそれを放した。すると腕がものうげに垂れた。

街にもまた、怪しい音響が長く尾をひいている。

だからやはり最近の数週間の中に、ある変化が生じたのだ。しかしどこに？ それは、どこにあるとは言えない抽象的变化である。変わったのは私だろうか？ もしそれが私でないなら、この部屋であり、この街であり、この自然である。どちらであるかを決めるべきだ。

\*

変わったのは自分だ、と私は思う。これが最も単純な

解決である。また最も不愉快な解決である。しかし結局、私があゝの急激な変化に支配されていることを、認めなければならぬ。事實はこうだ。つまり、私はものを考えることが非常にまれなので、その間にたくさん小さな変化が、私の内部に、用心しないでいる間に増してゆき、そしてある日、ほんとうの大変革が起きるといふことなのである。このために私の生活は、唐突でまどまりのない様相を呈したのだ。たとえは、私がフランスを去つたとき、私が向こうみずなふるまいにでたという人が大勢いたが、六年間の旅から突然帰つたときにも、また人びとは、同じことを言えたはずだ。私は、ペトルー事件の結果、去年職をしりぞいたあのフランス人の官吏のメルシェといつしよに、その事務室にいたときのことを、いまでもはつきり覚えている。メルシェは考古学上の任務で、ベンガルに赴くことになつてゐた。私も目ごろからベンガルに行きたいと思つてゐたし、彼は、早く行かないかと私をせきたててゐた。いまその理由を考えてみると、彼はポルタルを信頼していなかつたので、私にポルタルを監視させようとしたのだらうと思われる。いずれにせよ彼の申し出を拒絶すべきなんの理由も私には考えられなかつた。よしんばそのとき、ポルタルに対する彼のささいな策略が私に感づいてゐたにしても、それは彼の申し出を熱烈に承諾する、もう一つの理由でこそあつ

たはずである。ところが私のからだは麻痺したようになっていて、ひと言もしゃべることができなかつた。私は電話機のそばの緑色の布の上に置かれていたクメールの小さい立像を、じつとみつめていた。自分のからだに淋巴液びんぱかなまぬるい牛乳でいっぱいであるような気がした。いくぶんの憤懣ふんえんを隠した、このうえもない辛抱強さをもつて、メルシエが私に言った。

「どうです、正式に決めていただきました인데요。結局は承諾なさると思つていますが、すぐ承知してくだされば、なおさらありがたいんですよ」

彼はひどく香水のおう黒褐色のひげを生やしていた。彼が頭を動かすたびに、そのにおいを吸わされるのであつた。それから、一挙に私は六年間の眠りからさめた。

立像が不愉快でばかげたものに見えた。自分がすっかり飽きあきしているのがわかつた。なぜインドシナくだりまで来ているのか、考えてみてもわからなかつた。私はここでなにをしているのか？ なぜこんな人たちと話をしているのか？ なぜこんな奇妙な服装をしているのか？ 私の情熱は消えていた。それは幾年もの間、私をまきこみ、私をひきずりまわした。しかしいま、私は虚ろな自分を感じたのである。しかもそれが最悪なことではなかつた。私の眼前に、一種の無頓着むとんじやくの状態じたいで置かれていて、かさばつた、色あせた一つの観念くわんねんがあつた。

それがなんであるか、あまりよくわからなかつた。しかしそれがひどく胸をむかつかせるので、ながめてはいられなかつた。すべてこうしたことは、私にとつて、メルシエのひげの香水のにおいとこんがらがつていた。

彼に対する怒りに激して、私はからだをゆすぶり、無愛想に答えた。

「ご好意には感謝しますが、私はずいぶん長い旅をしました。こんどこそフランスへ帰らなければなりません」翌々日、私はマルセーユ行の船に乗つた。

もし私がまちがつていないなら、堆積たいせきしてゆくすべての徴候が私の生活の新しい破壊の前兆であるなら、ああそれは恐ろしい。それは私の生活が豊かであるとか、充実しているとか、貴重であるとかいう意味ではない。しかし私は恐れるのだ。生まれようとしているものを。私を奪い去ろうとするものを。——そして、私をどこへ連れて行くかうというのだろうか？ 私は、研究と著述をすべて計画のままにしておき、またどこかへ行つてしまわねばならないのだろうか？ 数カ月あるいは数年たつたときに、疲れきつて、がっかりして、また新しい廃墟はいこのまん中で眼をさますのだろうか？ あまり手遅れになら

\* 原注——オジニ・ペー……といふこの人物は、日記の中でしばしば問題になるだろう。彼は執達吏の書記であつて、ロカンタンは彼と一九三〇年にブーヴィルの図書館で知合いになつた。

ないうちに、私は自分の内部に起こりつつあることを、はつきり知りたいと思う。

一月三十日 火曜日

変わったことはなにもない。

私は九時から一時まで、図書館で仕事をし、第十二章の準備を終えた。パーヴェル一世の死に至るまでのロシアにおけるロルポンの滞在に関係したすべてのことがらである。これでひと仕事終わった。清書するまでもう問題は無いだろう。

一時半。キャフェ・マブリーに行つてサンドウィッチを食べる。ほとんどすべてに異常はない。どのキャフェでも、いつも異常はないのだが、特にキャフェ・マブリーでは、まことに実務家然とし、安心感を与える、人を食った感じの支配人ファスケル氏がいるおかげで、すべてが正常である。やがて午睡の時刻なので、もう彼の目は充血しているが、動作は活発でなんの渋滞もない。彼はテーブルの間を行ったり来たりし、そつとお客たちに近づく。

「ご満足ですか？」

彼がそんなに浣刺はつらつとしているのを見て、私は微笑する。客席が空になる時刻に、彼の頭も空になる。二時から四時まで、キャフェには客がいな。するとファスケル氏

は腑ぬけになつたみたいだ。二、三步あるく。ボーイたちが電灯を消すと、彼は無意識の状態に落ちて行く。この男はひとりでいると眠るのだ。

まだ二十人ほどの客が残っている。独身者、下級技師、店員たちだ。彼らは、「ほくららのねぐら」と呼んでいる素人下宿であつたたく昼食をすまずと、ちよつとした贅沢ぜいたくが必要だというみたいに、食後にここへ来て、コーヒーを一杯すすり、ポーカードイスをして遊ぶのである。彼らは少しうるさいけれども、気にならない断続的な騒音である。彼らもまた存在するには、幾人か集まらなければならぬのだ。

私は、ひとりで、完全にひとりで生きている。けつしてだれとも話をしないし、なにも受けねばなにも与えない。独学者など問題外だ。「駅員さんたちの店」のママのジャンヌがいることはいる。しかし、私は彼女と話をすると言えるだろうか？ とときどき夕食のあとで、彼女が一杯のビールを運んで来るとき、私は彼女にたずねる。

「今夜は暇かい？」

彼女がいいえと言つたためしはない。私は、時間ぎめかあるいは一日ぎめで貸してくれる二階の大きな寝室の一つへ、彼女のあとについて上がつて行く。私は金を払わない。私たちの色事はおあいこなのだ。彼女は楽しむ。

（彼女には一日に一人の男が必要だ。だから私以外にも大勢の情人を持つている）こうして、私にはその原因がわかりすぎているある種の憂鬱から解放されるのだ。しかし私たちは、せいぜい二、三の言葉をかわずにすぎない。しゃべることがなんの役に立つか？ めいめいは勝手に生きている。それに彼女の目からみれば、私はなによりもまずキャフエのお客にすぎないのだ。彼女は服を脱ぎながら言う。

「ねえ、ブリコっていう食前酒を知って？ 今週になつてそれを注文したお客が二人いたの。女の子が知らなかったの、あたしのところへききに来たわ。旅行者だったから、パリでそれを飲んだのよ、きつと。どんなものか知らずに買うのはいやだわ。かまわなかったら、靴下とらないわよ」

昔——それも「アニー」と別れてから長い月日が経つたあとも——私はアニーのことを考えた。いまでは、もうだれのこととも考えない。いや、言葉を見つつけようとさえ思わない。言葉は私の内部をいくらか早い速度で流れてゆく。私はそのどれをも固定しようとしなくて、流れるに任せる。私の思想はたいいの場合、言葉に結びつくことがないので、霧のままでもどまつている。それは、あいまいな滑稽な形態を描いては消えてゆく。私はすぐそれに忘れる。

あの青年たちには驚くほかはない。彼らはコーヒーを飲みながら、明快な、ほんとうらしい話をしていて、彼らは昨日したことを人にたずねられても、狼狽なんかすることなく、簡潔に答えただろう。私だったら、まごついてしまっただろう。ずいぶん前から、私がなにをしているかを、もうだれも気にかげようとしなないのは事実だ。人間がひとりで暮らしていると、語るとはどういうことであるかさえ、もうわからなくなる。ほんとうらしいことは、友人がいなくなると同時に消えてしまふ。孤獨な人は事件に対しても、その成行きに任せておく。世間の人びとがふいに眼前に現われてしゃべり、そして行ってしまふ。頭も尻尾もない物語にまきこまれる。なにかの証人となつたら、非常に困つた証人だろう。しかしそのかわり、ほんとうとは思われないことなら、キャンエなどではだれも信じそうもないことなら、孤獨な人間には不足しない。たとえば土曜日の午後四時ごろであつた。駅の工事場の板敷きの歩道の端を、空色の服を着た小柄な婦人が、笑いながらハンカチをふりつつあとずさりに走つて来た。それと同時に、クリム色のレイノコートを着て、黄色の靴をはき、緑色の帽子をかぶつた黒人が、口笛を吹きながら道の角を曲がって来た。たえずあとずさりしていたこの婦人は、夕暮れになると灯のほのぼの、柵につるした角灯の下で、この黒人につき当たつ



た。それでちょうどそこには、湿った材木のおいが強くする柵と、あの角灯と、黒人の両腕にかかえられた若くて可愛らしい金髪の婦人とが、夕焼けの空の下に同時に存在したのである。もし四人か五人の仲間での衝突を、そのときの柔らかな色彩や、わた毛のように見えた青いりっぱな外套や、明るい色のレインコートや、赤く見える角灯のガラスなどいっしょに、私が見たと仮定してみる。私たちは子どもらしい二人の顔に表われたびっくりした様子を、きつと笑ったことだろう。

ひとりきりの男が笑いたいと思うことは、めったにない。この場面の全体は、私にとって、非常に強烈で、狂暴でさえもある、だが純粹な感覚によって活気を帯びたものだった。それから、この配合が分解した。いまはもう角灯と柵と空しか残ってはいなかった。それでもまだかなり美しかったが、一時間たつて角灯がともり、風がでて、空が暗くなると、もはやそこにはなにも残っていなかった。

こうしたことは私にとって、非常にめずらしい経験ではない。このような無害な感動を私は一度も拒んだことがない。むしろ逆である。そしてそれを経験するには、ほんのちょっとひとりであればよいのである。ちょうど

よい瞬間に、ほんとうらしいものを追ひ払うのに十分な間だけひとりであればよい。私はいままでいつも世間の人たちのすぐそばにいて、孤独の表面にとどまり、危険の場合には、彼らの間へ避難しようとする決心を決めていたのである。私はこれまで、じっさいにおいては、孤独のアマチュアにすぎなかった。

いまやいたるところにテーブルの上の、このビールのコップのようなものがある。私はそれを見ると、言いたくなるのだ。やめたよ、もうゲームはしないぞ、と。しかし私は自分が孤独の道を進みすぎたことがよくわかるのである。私はだれでも孤独のへ限界を決めることはできないだろうと思う。だからといって、私が眠る前にベッドの下をのぞいたり、真夜中に突然寢室のドアがあくのを妄想して恐れたりする、という意味ではない。ただとにかく、私は不安なのだ。このビールのコップをへながめるのを避けようとして、もう三十分もたつ。私はその上を、その下を、その右を、その左をながめる。しかしへそれを見まいとする。私の周囲にいる独身者たちが、私にとってなんの救いにもなりえないことを、私はたいへんよく知っている。もう遅すぎる。私はもう彼らの間へ避難することはできない。彼らは私のところへきて肩をたたいて言うだろう。「このビールのコップ